

林業技術センター
普及班便り
(第36回)

いわての林業人15

一 はじめに

今月の普及班便りでは、大槌町金沢地区で原木シイタケの生産に取り組む三浦蔵人さんをご紹介します。

二 参入に至る経緯

金沢地区は、周囲を山に囲まれ、中央を金沢川が流れる、水と原木に恵まれた地域です。三浦さんは、町



三浦 蔵人 さん

役場を早期退職し、3年前に栽培を始めました。もともとシイタケ栽培が盛んな地域ではありますが、三浦さんは、自宅周辺の資源と環境を最も有効に使える作物として、シイタケを選びました。現在は、周辺の生産者の皆さんに教わりながら、ご家族4人で生産に取り組んでいます。

三 仕事への取り組み

(1) 栽培の流れ

年間の植菌本数は約3千本で、来年は7千本、将来的には毎年5千本を予定しています。原木は分収林等から伐採し、伐採後はコナラを植えています。伐採、搬出作業はお父さんと2人でこなしていますが、「道路開設や搬出に機械を借りたところ、その経費で原木単価が購入品並になってしまった」と苦笑。「原木入手の難しさが、新規参入の大きな障害になっている」と指摘する一方で、「かつては多くの地域で行なわれていたように、生産者が共同で伐採、搬出作業を行なえるようになれば、コストと労働災害を減らせるのでは」と願い、「自らも作業に習熟し、とりあえずテモトとして参加したい」と意欲をのぞかせます。

種菌は大手2社の主要菌を半々ずつ使い、リスク分散に努めています。

植菌後のホダ木は時期に応じた資材で被覆し、菌の活着を図っています。そのまま伏せした後、翌年秋（形成菌では当年冬）にホダ起しをして発生に備えます。

(2) 工夫の見られるホダ場

主要なホダ場は自宅裏の斜面です。前歴は採草地と畑で上木が少ないため、柱と庇陰資材を利用して簡易な人工ホダ場を作り、直射日光を避けられています。また、散水チューブをホダ木上に設置することで乾燥に対処しつつ、夏場には散水ノズル（φ25）



資材を活用したホダ場

で放水し、高温にも対処しています。さらに、この陽当たりを逆手に取って、ホダ木を被覆することにより、早い時期からシイタケを採取していきます。しかし、傾斜がきつくと、資材の掛け替えやホダ木の入れ替えが困難なため、斜面を段切りし、等高線と平行にホダ木を伏せ込みたいと話していました。

(3) 今後の経営

こうした工夫で、ホダ木1本からの乾シイタケ年間生産量（単収）は30グラムと、県の平均を上回っています。「今後は小規模なりにきめ細かな管理で単収50グラムを目指し、他の作物からの収入と併せて安定的に経営したい」と語っています。

四 おわりに

「採算が厳しいので、まだまだ素人です」と謙遜する三浦さんですが、ホダ木の世話をする姿は、立派な生産者でした。

普及班便りでは、これからも森林・林業に携わるさまざまな方々を紹介していきますので、皆様の地域で活躍されている方をお知らせください。

林業技術センター普及班

019(698)1337